洞爺湖

田中瑞穂

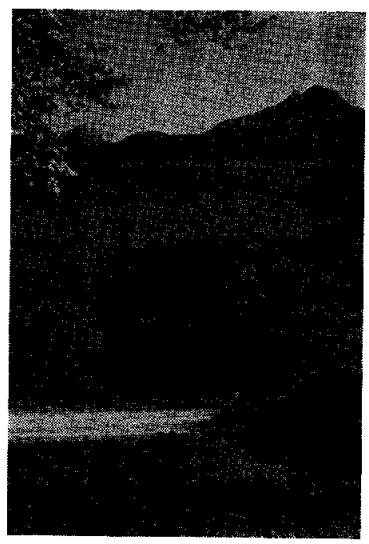
私が支笏洞爺国立公園管理員として、洞爺湖に赴任してきてから三カ月余りになります。前任地は、日光国立公園の尾瀬で、ここで三年間過ごしました。

尾瀬と洞爺湖は同じ国立公園といっても、景観要素、土地所有関係、利用施設、利用者層など、すべての点で違っており、いろいろ考えさせられました。

尾瀬は自然公園としてもっとも優れた要素をたくさん持っていることから、日本の国立公園の中でも、とくに厳重な自然保護策がとられており、真に国立公園らしい公園ということができましょう。尾瀬ではあくまで大自然が主役であり、利用施設は脇役、そして利用者自身もただの見物人ではなく、自然と一体化したドラマの構成員となっています。

たとえば、車道が一切つくられていませんので、ここを訪れるには、徒歩にたよるほかありません。このために利用者は限定されますが、そのかわり、真に自然美を味わおうという人達だけが入るので、尾瀬の利用形態は国立公園の利用のあり方の、一つの理想的なタイプといえます。

一方、洞爺湖は北海道を代表する典型的な観光地ということができます。その利用者層は広く、道内からの家族連れ、日帰りドライバー、本州からの各種観光団、いわゆるカニ族など様々です。しかし、これらの人達が洞爺湖を訪れる動機は割合単純なようで、洞爺湖が有名な観光地だから、一度は見ておこう、といった程度の人達が多いように思います。そのため洞爺湖では、自然と人間の交流というものがあまり感じられません。利用者はただ自然を見物するだけ、中には自然の中をただ通過するだけという人もあるようです。



洞爺湖（向洞爺）

洞爺湖と尾瀬ではどうして自然と人間の関係がこんなに違ってくるのでしょうか。その原因として三つほど考えられます。

一つは、尾瀬では歩くことが唯一の通行方法であるのにくらべ、洞爺湖へは寝ていても車が運んでくれるということ。これは重要な意味を持っていると思います。尾瀬に入るには、一般コースで二時間余り歩かなければなりませんが、この間に文化生活の恩恵を離れ、一番原始的な歩くという通行手段をとることによって日常性から脱却し、周囲の自然景観によって、徐々に心身ともに自然にひたれる心がまえができ、尾瀬に入ったときにはすでに自然に素直にとけこめるようになると思われます。

一方車による利用では、自然と人間との間に車という介在物が入るため人間が直接自然に接することができないので、自然と人間の間に一体感は生まれないし、また一時的に車からおりて自然にふれたとしても、短時間では自然とふれ合う心の準備はできないので、やはり一体化は困難といえましょう。

二つとして、尾瀬では利用施設があくまで控え目に、脇役として存在するのにくらべ、洞爺湖では、むしろ利用施設の方が主役のはずの自然を押しのけて、主役にすわろうとする傾向がみえ、ますますそれがはっきりしてきていること、これは洞爺湖を都市化し、歓楽地化させて洞爺湖の自然美をかすませ、魅力のないものにしてしまうことになります。

三つとして、国立公園区域のあいまいさが指摘されます。尾瀬ではてくてく歩いてやっと峠に達したとき、いままで通ってきた森林とはまったく違った景観が眼下に突如として開ける意外性を持ち、ここから国立公園だという意識を高めるのに役立っていますが、洞爺湖ではどこから国立公園に入るのかはっきりせず、利用者に国立公園に入るという緊張感、つまり雰囲気に欠けるきらいがあるように思います。

以上、洞爺湖の悪口ばかり書いてしまいましたが、尾瀬は国立公園としては別格で特異な場所であり、日本の国立公園の大半は洞爺湖的であって、自然景観では洞爺湖はむしろ優れたほうに属していると思います。しかしながら、開発がどんどん進みつつある洞爺湖を考えるとき、自然が美しく保たれてこそ国立公園の価値があるのであって、人間と自然とを結びつける手段をつねに模索する方向で開発を考えてゆかないと、国立公園の真の発展は望めないと思います。

（支笏洞爺国立公園管理員）